

ウルリム
響

星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第43号

2007年5月30日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

周縁化されてきた使徒マグダラのマリア

アンナ 三木メイ

日本の大学のキャンパス内を闊歩する大多数の学生にとっては、キリスト教の世界は遠い存在です。それでもキリスト教の授業を受講する学生たちにその理由を聞いてみますと、目新しい理由の一つに、『ダ・ヴィンチ・コード』があります。世界的ベストセラーとなったこのミステリー小説は3年前に邦訳出版され、昨年は映画も上映されて大きな話題となりました。その内容についてはいろいろと物議をかもしていますが、ともかくこの小説に刺激されて、キリスト教の歴史に新たな興味を持ち始めた青年たちが大勢いるのは確かです。

このブームのおかげで、キリスト教における「正統」と「異端」、男性中心性と女性の周縁化などについては幾分話がしやすくなりました。また、マグダラのマリアが注目され、「マリアによる福音書」についての研究書の邦訳本までもが一般書店に並ぶようになりました。この写本の断片には、マグダラのマリアが知的にも霊的にも優れ、男性の十二使徒をはるかに凌駕するほどの最高の使徒



向かって左が三木メイさん

であったと推察できる内容が記されています。だからこそ、これは「正統」な教会によって「異端」文書として封印されてきました。キリスト教会はなぜ女性を聖職制度から排除し、「周縁化」してきたのか。その問いが、今思わぬところから発せられてきているのです。

「周縁化する (marginalize)」とは、その人を重要な存在ではないと感じさせ、さまざまな重要な決定や出来事に影響を及ぼすことができない、力のない立場に追いやることです。女性差別のみならず、あらゆる差別や人権問題に通じるキーワードです。イエス様は、周縁化された人々の側に立って福音を宣教されました。そのキリストの姿を私たちの教会は本当に継承できているのでしょうか。来年、日本聖公会は女性の司祭按手実現から十周年を迎えますが、いまだに女性だからという理由で司祭志願を認めない教区が複数存在しています。女性と男性の対等なパートナーシップによる福音宣教の実現へのチャレンジは、まだ始まったばかりです。

(みき めい 京都教区執事)

もくじ

| |
|------------------------------|
| 周縁化されてきた使徒マグダラのマリア/1 |
| 時のしるし 「昭和の日」/2 |
| 多民族・多文化共生のすすめ 今一度大事な一票の意味を/3 |
| 韓国訪問ツアーに参加して/4・5 |
| 拡大理事会開催！=課題と今後の展望を求めて=/4・5 |
| 【写真】 聖公会生野センター フォトギャラリー/6・7 |
| 韓国からのお便り 帰農しちゃいまして/8 |
| 済州4・3事件がきっかけのものはないか/9 |
| こんな本あります 金石範『地底の太陽』(集英社)/10 |
| 詩『蔵入れされる昭和』/11 |
| リレーエッセイ・余韻/12 |

4月29日は「昭和の日」でした。「みどりの日」は5月4日に移されました。休みが増えるのはありがたい。でもどうということなのでしょう。

「みどりの日」はこれまで4月29日でした。元は昭和天皇の誕生日だったのです。今回昭和天皇の誕生日があらためて「昭和の日」とされました。調べてみたところ、超党派の「昭和の日」推進議員連盟(約400名)が運動し、「昭和の日」推進ネットワーク加盟者が170万人の署名を集めてついに実現に至ったとのこと(特定非営利法人「昭和の日」ネットワークのホームページより)。

「激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす」と政府は説明しています。けれどももっとはっきりした主張が背景にはあります。「昭和の日」推進ネット会長(当時)は次のように述べています。「『昭和の日』実現を願うのは、身をていして日本に平和を取り戻された昭和天皇のご聖断とご遺徳をしのび、62年強という史上最長のご治世において、日本を世界の一流国に仕立て上げた栄光の『昭和』を国民の脳裏に刻みたいとの思いからだ。」(産経新聞「談話室」平成[ママ]14年1月19日)。

私は、歴史が「明治」「大正」「昭和」という元号で区分されることに疑問を持っています。これは歴史、時間が天皇の代によって区切られるということです。暦というものは、誰を(何を)中心に「時」を、「時間」を理解するか、という深い問題に関係しています。

日本の元号は中国の王朝が定めた年号にならったものでしょう。王朝が並立する場合、その国(皇帝)が定めた年号が通用する範囲が、その国の支配が及ぶ範囲です。年号は皇帝の支配を具体的に表わすものです。たとえば、魏、蜀、呉の三国鼎立の時代、五丈原の戦いの年、西暦234年は、魏では「青龍」、蜀は「建興」、呉は「嘉禾」何年と言っていました。その国の年号を使うことは、自分がその国の支配のもとにあることを認めることになります。

旧約聖書の出エジプト記12:1-2にこう書いてあります。

「エジプトの国で、主はモーセとアロンに言われた。『この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい。』」

「昭和の日」

井田 泉

これに従って、それまでエジプトの暦によって生活してきたイスラエルの民は、神がイスラエルをエジプトから救出してくださる(くださった)その月を正月(年の初め)と決め直したのです。これは、エジプトのファラオ(王)の支配から神の支配のもとに移る、という信仰告白です。神の救いの時を時間の基準、歴史の原点とするのです。

先日、ちょっとした事件があって警察を呼びました。書類に署名することになり、日付で「平成」と書いてあるところに「2007」と書くと、お巡りさんは元号で書いてほしいと言います。「私は書かないので必要ならそちらでどうぞ」と言いました。するとお巡りさんは自分で「19」と書いた後、私に訂正印を求めました。

尹東柱は、「昭和18年」春、「平沼東柱」として来日し、立教大学の便箋に「たやすく書かれた詩」を記しました。「灯火をともして 闇を少し追いやり/時代のように来る朝を待つ 最後のわたし/わたしは わたしに 小さな手を差し出して/涙と慰めで握る最初の握手」。そして末尾に「一九四二。六。三」と書きました。その便箋の写真が残っています。「昭和」と書く以外に許されなかった時代。しかし彼にとってはどうしても「一九四二」でなくてはならなかったのです。

昭和改元の詔書(天皇の署名・印のある重要な公文書)があります。読みづらいので現代語に訳します。「わたしは自分の祖先のおごそかな霊によって大なる統治権を継承し、天下の政治を支配している。ここに定めに従って元号を建て、大正十五年十二月二十五日以後を改めて昭和元年とする。」「昭和」はこのように天皇の主権から始まったのです。

1945年8月15日は、大日本帝国という巨大な牢獄からの解放の日です。神がその不法な支配を終わらせ、アジアと日本を解放してくださった、と私は理解しています。1945年を歴史の基準とすべきだと思います。「昭和」はアジアの隣人にとっては胸の痛む言葉であることを思うと、祝日が増えたことを手放して喜ぶことはできません。あえて「昭和期」と言うなら、平和憲法こそその時期の最大の宝物です。

(いだ いずみ 京都聖三一教会牧師)

「今一度大事な一票の意味を」
～投票できない人々と選挙～

金光 敏

生野区を東西に分けるソカイ道路。戦前に整備されたこの軍用道路も、今では区民の生活に欠かせない。ソカイ道路の正式名称は「矢田鳴野線」と言う。北は、大阪城のお堀りを覗く城東区鳴野の下町にぶつかり、南は大阪の反差別・人権運動を支えた被差別部落の東住吉区の矢田とつながる。

この南北に走るソカイ道路と、天王寺区細工谷から今里新地へと東西に結ぶ道路の交差点、その一角に、いつからか春と秋に輝くような花畑が生まれるようになった。道路拡張の予定地として確保された金網に囲まれた空き地に、行きかう人々の誰もが足を止めて目を細める花畑がある。

都会の片隅にこんなに美しい花畑が存在しようとは誰の考えであろうか。地域のどなたかだろうか?毎年春と秋に色とりどりの花の種を蒔き、その期待に応えるようにして素晴らしい花々が満面の笑みで空に向う。

生野区の雑踏も、瞬間にしてのどかな風景に変えてしまう美しい花々。こんなふうに花々が街中にあふれるならば、人と人が、人と自然が、もっとやさしい関係に変わるのではないかと花々の前で思い浮かぶ。

去る4月8日に、私の住む大阪市生野区でも市議、府議を選ぶ選挙が行われた。生野区は自民党が強いところで知られる。また、公明党の基盤も磐石だ。そして、中小零細企業を対象に商工団体により組織された共産党の組織基盤も広い。今年選挙結果も案の定、これまでの市議会選挙同様5名の市議定数のうち、自民党から3名、そして各1名ずつを公明党と共産党の公認候補が当選を果たした。

定数5名の市議選に生野区から立候補したのは10名、



生野区「猪飼野」の一角にある素敵な花畑

政党公認候補は7名、残りは無所属候補者だった。そのうち選挙戦を通じ、生野区の特徴である在日コリアンの問題に触れたのは2名の無所属候補のみ。当選者の中には一人もいなかった。

議員定数は区の人口数から算出される。だから、生野区内に暮らす日コリアンの数も定数換算の対象になる。もし、在日コリアンの数を定数換算に含まなければ、3名か4名に定数は減る。そんな生野区選挙戦で、在日コリアンのことがほとんど注目を浴びない。国籍差別で無年金状態になっている在日高齢者や障害者のことも、卒業資格や公的補助で厳しく制限されている朝鮮学校の処遇改善も、地域の公立学校で取り組まれる民族学級の制度保障も、放置される民族を理由とする入居差別も、黙殺され市政に声は届かない。

国会で定住外国人の地方参政権法案がたなごらしになっている。自民党は絶対反対の立場であり、創価学会や民商を中心として組織化された在日コリアン支持層を持つ公明党と共産党は賛成の立場。どこまで言っても利害の範疇であり、マイノリティの人権そのものを考えているとは思えない現実が感じられる。

国籍で言えば四分の一だが、民族的背景で言えば、それ以上のコリアンが集住している生野区で、民族共生の課題が、地域政治で取り上げられない理由はいったい何か?

今年選挙の年だ。この原稿が掲載される頃には、4月22日の統一地方選挙後半戦と、福島・沖縄での参議院補欠選挙の結果も出ている。今年7月には参議院選挙が控えており、それに続き今秋には大阪市長選挙が、来年2月には大阪府知事選挙がある。取めた税金の行方や公正で公平な社会づくり、人権や平和の課題についても、デモや集会ではなく、ダイレクトに市民たちが政治に声を届ける絶好の機会だ。

その選挙に貴重な一票を投じることができない人々、私たちが在日コリアンをはじめ定住外国人(もちろん、重いしょうがいを持つ高齢者やしょうがい者なども同じ)は、投票権を持つ人々の良心を信じ、ただ結果を待つしかない。大事な一票だから、有権者には棄権せずに投票に行ってもらいたい。今年7月の参議院選挙では、ぜひ投票に行けない私たちの思いも汲み、人権と平和の課題について見識を持ち、行動できる候補者に投票してほしい。少なくとも首相の人柄がよさそうだという理由で、政権与党に投票することだけではやめてほしい。

(きむくあんみん コリアNGOセンター事務局長)

韓国訪問ツアーに参加して

奈良慶治良

4月12日ソウルに着くと、その地も春であった。漢江の岸辺に咲く満開の桜が私達一行14名を迎えてくれた。

今回の韓国訪問ツアーは大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会が主催したもので、堺聖テモテ教会の岩城聰司祭を中心に、聖公会生野センターの呉光現さんが主な案内を引き受けてくださった。

二日目、まず西大門刑務所歴史館を訪れた。祖国の独立のため、日本の侵略に立ち向かった人々が拘束され、監禁され、拷問され、処刑された場所である。目を覆いたくなるような苛酷な様子が再現されている。目を見開いてそれらを直視した時、朝鮮の人々の国を愛し、民族を愛する心の叫びが聞こえてくる気がした。その後、3・1独立運動の発祥の地であるタブコル公園を訪れた。公園の周りの独立運動の様子を描いた12枚のレリーフを見た。独立のため万歳を叫びながら、力強く行進する姿、それを抑圧しようとする日本官憲の姿が未だ臉に焼き付いている。

午後は、大韓聖公会の社会宣教活動を見学した。

「ビジョントレーニングセンター」と「野宿者再起相談支援センター」である。野宿者（ホームレス）を助け、社会復帰を図る施設であるが、単に宿舍の提供だけでなく、医療、食事はもとより、自立のための職業支援、文化活動支援までも行われ、そのための施設、組織、プログラム、それとスタッフの取り組む姿勢には感心させられた。

三日目は江華島にあるオンスリ教会を訪れた。韓式建築の古い教会で、文化財としても素晴らしかったが、司祭さんが祈りの中で、「目に見えるものだけに心を奪われないように」とおっしゃった言葉が印象的で韓国の聖公会の生き方がうかがえるような気がした。

四日目は日曜日でソウル大聖堂での礼拝に出席した。

今回のツアーはそれ以外に、江華島で食べた蔘鶏湯の味、貞洞劇場での韓国舞踊など心身ともに充実した旅であったと感謝している。

それとともに、大阪教区の聖公会生野センターの社会宣教活動の意義も再確認した旅であった。

(なら けいじろう 堺聖テモテ教会信徒)

拡大理事会開催！＝課題と今後の展望を求めて＝

齊藤 壹

【はじめに】

聖公会生野センターでは3月14日、拡大理事会を開催しました。開設15年を経て、財政的にも厳しい状況に置かれているセンターの課題と展望を論議するためです。約4時間に渡って、現状分析と課題、そして今後の展望を話し合いました。

【現状に関して】

○建物の容量を越える活動をしている現実

約100坪の土地に礼拝堂・事務所・保育室・牧師館があり、事務所も共有である。一部プログラムのために賃借している小さな民家を別にす

ると、センターの占有スペースはない。プログラムは空き時間を利用しておこなっている実情である。その民家すら活動の発展と共に手狭である。

○財政的に破綻？ 募金は大阪教区に関しては後援会の努力で上向きになってきたが、聖公会全体としては年々減少している。主教会を通して各教区にセンター担当者の選定をお願いしている。働きが活発になるにつれて、諸経費は増えざるを得ない。新規事業開始時、管区からの補助が申請の半額となったこともその一因である。

○運営主体が不明確であったのではないかと大阪

韓国訪問の旅に参加して

鈴木光子

私たちの隣の国、韓国。一度は行きたいと思っていた場所をやっと訪問することができました。

盛りたくさんのプログラムの中、2日目に訪れた西大門（ソデムン）刑務所歴史館には、大きな衝撃をうけました。

ここは、日本が韓国を支配し、独立運動家を収監した場所で、死刑場も当時のまま残されています。館内には、拷問風景を再現する生々しい人形や器具等が展示されており、それは思わず目をふ



聖公会 野宿者再起相談保護センターの玄関

せ、耳をふさぎたくなる光景でした。

ここは韓国の人達にとっては、国のために命を捧げた烈士たちを偲び、国を愛する志を学ぶ場となっていると聞きました。

丁度、社会見学ででしょうか、韓国の小学生たちが次々と先生に連れられてやってきました。子どもたちの私たち日本人をみる、さすような目に思わずたじろぎ、子どもたちがあのような惨劇の場面をみることで、反日感情だけが心に刻みこまれるのではないかと恐れをいただきました。

日本では、子ども達に歴史の真実をしっかりと伝えていません。そういう中で子ども達が大きくなった時、隣の国、韓国とどのような交流ができるのでしょうか。心を通い合わせることができるのでしょうか。

私は、何をしなければならなくて、何ができるのか。

今、私にとっておおきな課題です。

(すずき みつこ 尼崎聖ステパノ教会信徒)

教区が主体となるべきではなかったか。

○センターの活動は、日本聖公会の戦争責任告白と深く関わっている。

【今後に向けて】

○社会宣教の位置付けを明確にする→各教区に募金の要請を強く訴える。具体的な金額を明示して各教区にお願いする。

○総主事の立場を大阪教区で責任を持つべきではないか。大韓聖公会に人的・金銭的な支援を要請するのはどうか。

○「関西3教区（京都、神戸、中部など）生野委員会（仮称）」を結成し活動の支援、教会への啓発を行なうべきではないか。

○拠点を移し、展開を図ることも検討していく。ある非営利団体がセンターを評価し、廉価で建

物の貸与を打診している。

■上記の論議を踏まえ主に以下の決議をした■

- ①各教区に、金額を明記した募金または負担金を要請する。
- ②総主事の処遇を大阪教区のスタッフ化することを含めて討議・決定を大阪教区に要請する。
- ③「関西3教区生野委員会」の結成を促す働きをする。

以上であるが、聖公会生野センターの働きが教会内外で評価されてきたことを思う時、「ピンチはチャンス」と発想の転換も含めて今後ともセンターを支えるのみならず、全聖公会的、主体的な参与を期待すると共に責任のある関わりを持っていきたい。

(さいとうはじめ 司祭 聖公会生野センター副理事長)

学んでいます＝韓国語



金秋子さん

初級の金秋子さん。会話は相当なものです、体系的に学びたいと初級クラスで頑張っています。20代の息子さんと一緒に寺田町の商店街で韓国料理家「どや」を運営しています。いつ会っても笑顔の絶えないさわや

かな「おかあさん」です。

一度「どや」に食事をしに行きませんか？

(どや：電話06-6715-6200 生野区林寺3-4-5 生野銀座商店街の中、バス停 生野八坂神社前から歩いて5分)

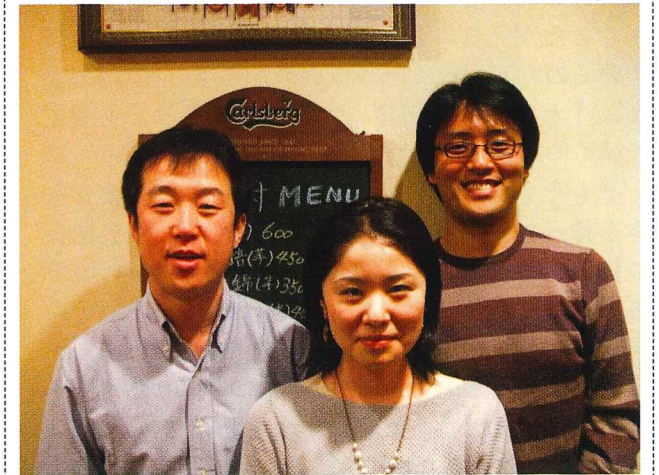
聖公会 生野センター

フォト ギャラリー



4月15日、ソウル大聖堂のミサの後の記念撮影（大阪教区韓国訪問団）

ありがとうございました。



韓国語教室の（左から）全永男、高燦玉、閔淳奎さんの3人の先生が3月末でそれぞれ新しい場に旅立たれました。3年以上にわたり、すばらしく楽しい講座を持ってくださり感謝しています。またこれからもよろしくお願いします。

NHK 歳末助け合い運動で 在日高齢者エンパワーメント セミナー開催



自分の楽しい思い出を描いてみよう。思い出を「絵画」で表現しました。



介護保険の上手な利用の仕方を聴くハルモニたち。

よろしくお願いします



芦田 聡

デイサービス、「クリンもだん」を4月から引き継ぎました。障害者自立支援法のもと新しい「地域活動支援センター」を目指しています。働かしてもらって約1ヵ月の新米なのですが利用者の方々や周りの方々がとても気さくに接してくれるので、すごく楽しくやらせてもらっています。これから色々な活動を企画したりして、少しずつ皆で成長していけたらいいなあと考えていますので。どうぞよろしくお願いします。（あしだ さとし）

スタッフ評：とても穏やかな人です。利用者にとって何が大切かをいつも考えている方です。実は音楽をやっていて腕前は相当ではないでしょうか？オリジナルの曲もたくさんあるとか・・・。

帰農しちゃいました

中村 香

「かおりちゃん帰農するんだって!」と大爆笑され、おいおい笑ってる場合でも無いだろと思ったりもしたが、日本の家族は旦那と私を信じてくれているのだろう(興味がないのか?!)。韓国の家族は「オトケ モッコ サラ(どうやって生活していくの)」と大反対であった。

そもそも韓国の家族は、旦那が日本語の教育免許を持っていながら、超多忙&安月給の教会関係の仕事をしていること自体、納得がいかないものであった。せっかくソウルに行ったのになんでそんな仕事をしているんだと、会う度に怒られた。「お金お金」と言われるのにも疲れた頃、とどめをさすように「私たち帰農します。」と言うものだから、開いた口が塞がらない。

そんな韓国の家族を理解するためには、韓国の歴史を学ぶ必要があるのであった。韓国人の説明によると、日帝植民地時代、朝鮮戦争、南北分断、民主化運動、悲劇と混乱の歴史の中、食べることもままらなかつた時代、働いて働いて、本当に苦勞してここまでやってきたという。日本だって同じだと言われそうだが、歴史的にも風土的にも日本とは全く違うということを、韓国に住んでみてひしひしと感じる。

だから子どもには絶対そんな苦勞をさせたくない、させてはいけないのだ。その心配が「お金お金」となって口から出てくる。これが一般的な韓国の親の愛情表現なのである。

韓国の家族が私たちの新しい家を見に来た。ああは言っても田舎に来ると昔のことを思い出すのか何だか嬉しそうで、家をとてとても気に入っていた(なんてたって土の家だから)。「あんなに反対してたくせに」と冗談を言って笑い合った。お昼ご飯の時、お義父さんが言う。「今日朝の祈祷会に行ってきたことを祈ったら涙がぼろぼろこぼれたわ」と。そして突然グフツと言って泣いた。心配の涙だということにはたから見ても分かりそうなものだが、ドアホな私は「こんな所に住めて良かったね」って嬉し泣きかしら、と思っていた(あくまでもポジティブ)。

韓国の家族の、私たちを心配する心境と、親父を泣かせてしまった旦那の心中は、想像するだけで身がきゅきゅとよじれる。

日本の家族を思ったりもする(え、やっぱり興味なし?!)。

それでも私たちは今、最高に幸せなのだ。金も無い仕事も無い私たちが今、フクチブ(土の家)を与えられ、畑と田んぼを与えられ、仕事を与えられ、今を生きている。お隣りさんも帰農した5人家族で、本当に韓国人ですか?と思うぐらい考え方が新しく、お酒を飲みながら色んなことを語り合える。毎日子どもがタクチ(めんこ)を持って遊びに来ては全部取られたと泣いて帰る。こんなに幸運でいいのだろうか。

確信はあった。身体が悪くなったのも、「神と自然に帰れ」というメッセージとして受け取ったし、この帰農という私たちの目標は、神(やら宇宙やら)から与えられたものであり、それに従う以上、悪いものが与えられるはずがない、と。しかしこんなにもトントン拍子にことが運ぶとは思ってなかった。

お金が無いことに変わりはないし、生まれて初めての農業も、これからのことも、どうなるか分からない。それでも神への信仰の分だけ、与えられる気がする。心配したら心配した分だけ。信じたら信じた分だけ。

だから、韓国に住んでいて辛いことはあるけれど、明るくがんばって生きていこうと、健気にも(自分で言うなー)思うことができた、春。

扉を開けると新緑と桜が咲き乱れる、季節。畑に植えたとうもろこしが、早く食べたい。

(なかむら かおり 韓国在住)



中村香さんの新居の手造りの表札

済州4・3事件がつきつけるものはなにか

高村 竜平

私が済州に住んでいたのは、2000年4月初めから2002年の2月までだった。2000年の4月といえば、「4・3特別法」が施行されてはじめての4・3事件の慰霊祭があったときだ。4・3事件は、米軍政と当時の自治的な組織との対立が決定的になった1947年3月1日から、翌年5月の南朝鮮における単独独立選挙に対して、南北分断を固定化するものとしてボイコットを主張する勢力が4月3日におこした蜂起をへて、武装勢力とそれに対する軍と警察の鎮圧作戦によって数万人とも言われる犠牲者が出た事件のことだ。

長い間「共産暴動」と扱われてきたこの事件の見直しをもとめる運動は、1980年代の末から韓国でつづけられてきた。私が2000年当時見ていた運動のなかでは、犠牲者のなかにはたしかに蜂起に参加したりそれを指導したりしたものもいたし、また鎮圧のため出動した軍警もいたものの、大多数はそのあいだで右往左往しつつ殺された人々であったことが強調されていたと記憶している。そして「誰がどちらがわなのか」を区別することを目的とするのではなく、それらの死者を「時代の犠牲者」として反省の材料にしよう、という動きに共感を持ったものだ。しかしこれは、犠牲者をひとまとめに扱おうということではなかった。当時のことで最も記憶に残っているのは、事件の慰霊空間をとりあえず作ってしまおうとする当局に、ある遺族が投げかけた「慰霊はわれわれ遺族が樹を一本植えてもできる。政府がやらなければならないのはそういうことではなく、事件に関する資料を公開することだ」という批判だった。犠牲者ひとりひとりについて、その犠牲の経緯を遺族が追跡可能なようにすることが必要なのであって、いくら立派な公園でもただ造っただけでは意味がない、ということである。遺族会による集団虐殺地見学に同行したときにも、自分たちの父母らが、いつ・どこで・どうやって殺されたのか、をなんとか知ろうとする遺族の姿が印象的だった。(ここには、毎年命日に祭祀をおこなう韓国の風習が反映している。遺族にとって、命日が分からず誕生日や連絡が途絶えた日に祭祀をおこなうことは、つねに負担となっているようだ。そしてこのような遺族の感情が、事件の真相を明らかにする原動力のひとつとなっていたことは間違いのないだろう)。



2006年4月3日、慰霊祭に出席した盧武鉉大統領

だが、今年4月21日に大阪・観音寺で行われた慰霊祭に先立っての、前「済州4・3研究所」所長による講演では、4・3事件が韓国最初にして最大の「統一運動である」という点が強調され、犠牲者は統一の理念に殉じたように語られていた。なるほど、件の選挙では道内3選挙区のうち2箇所が投票者数不足で無効になるほど、それは大衆に支持された蜂起であったといえるだろう。けれどもその後の死者もふくめて、まるで統一運動の英霊のように言うのは、「アカ」としてひとまとめに扱われてきたことの単なる裏返しにならないか。それでは、どちらが正しいのかが逆転しただけで、敵味方の対立は解決しないのではないだろうか。

済州の地方新聞社の記者たちが事件を取材し出版したものの翻訳である「済州島四・三事件」(新幹社、全6巻)は多くの被害状況を記録しているが、私にとって衝撃的なのは、畑に行き行って殺されたり牛を追って殺されたり(たとえば同書第4巻76-79ページ)、という不条理な死に方が数多くみられることだ。犠牲者のなかにはただ日々の生活を送ろうとして殺された人たちも多かったということこそが、この事件が私たちに突きつけるもっとも重大な「現実」ではないだろうか。その「現実」がいかに多種多様か、被害のあり方を個別の経験に即して明らかにしていく作業の必要性は、今でも薄れてはいない。

(たかむら 竜平 神戸山手大学人文学部教員)

済州四・三事件を日本語でわかりやすく書いてある「済州四・三」(済州四・三研究所編・許榮善著・民主化運動記念事業会)を手数料と送料でおわけします。希望の方は一冊につき500円を郵便振込で送金してください。(振込番号は12ページにあります)

金石範『地底の太陽』(集英社)

磯貝 治良

戦後の日本語文学圏に屹立する小説は？と問われれば、野間宏『青年の環』(岩波文庫)、埴谷雄高『死霊』(講談社文芸文庫)、大西巨人『神聖喜劇』(文春文庫)などが思い浮かびます。そのうえで私は、金石範『火山島』(文藝春秋)全7巻と応えます。

金石範は1957年に「鴉の死」「看守朴書房」(いずれも文藝首都)を発表して以来、「済州島四・三事件」を描きつづけてきました。冷戦下における最大の民衆蜂起と国家テロリズムの抗争の悲劇をタブーの闇から歴史の真実へとよみがえらせたのです。『火山島』はその文学的集大成でした。

『火山島』1万1千枚が完成したのは1997年。民衆蜂起の壊滅とともに主人公李芳根はじめ登場人物の多くが命を落とすなか、主要人物である南承之と李芳根の妹有媛は死の島を脱出して日本に渡りました。暗たんたる気持で小説の最後のページを閉じた読者は、生き残った二人に希望を託しつつ、日本の戦後をどう生きるのだろうか、と胸を痛めたにちがいありません。そんな読者の思いに応えたのが『地底の太陽』です。

南承之が密航船で大阪に着いたのは49年4月。彼は日帝時代に日本で育ち、祖国に渡って南朝鮮労働党員としてパルチザン闘争に加わった青年ですから、ふたたび日本で生きることになったわけです。小説は南承之が大阪に着いて1カ月ほど後から始まり、50年6月のユギオ(朝鮮戦争)勃発の直前までを時代背景にしています。

その時期、日本では下山、三鷹、松川などアメリカ占領軍が工作した謀略事件が相次ぎます。朝鮮半島有事を見すえて、共産党と国鉄労働者への弾圧をねらったのです。在日朝鮮人に対しても団体等規正令による在日本朝鮮人連盟の解散・財産没収や民族学校解体などの弾圧が加えられます。阪神教育闘争はそれに対する抵抗闘争でした。

とはいえ『地底の太陽』の主人公が、そんな政治の嵐に巻き込まれるというわけではありません。

作者は徹底して、記憶との抗争という内面のドラマを追って、小説の時空を造り上げるのです。

「四・三事件」を逃れ、その記憶を抹殺しようとしたはずなのに、主人公の肉体を埋めつくしている想念と意識は記憶の塊です。自分をゲリラの敗残兵、逃亡者とみなし、「おれは豚になった。豚だ、豚だ」と責める罪意識から逃れられないのです。日常の光景さえもが死の島での体験の幻像となって、内からうめきだし、追いかけてきます。たとえば町を走るバイクの音が機関銃の音となって。

人間の意識下の想念や自意識を夢によってリアルにあるいは寓意的に表象するのは、金石範の独壇場です。この作品でも、呼応しあい、連鎖する夢が決定的な役割を果たします。『火山島』の李芳根は、民衆蜂起の壊滅と期を一にして、拳銃をこめかみに当て、引き金を引きます。49年6月19日。その運命の日、南承之は日本にいて、ハルラ山中で李芳根と会う約束に10分遅れる夢を見ます。そして同じ日に、東京にいる芳根の妹有媛も兄が消えた夢を見ます。心を通い合う二人が、かけがえない人の自死を夢に見るのです。

その衝撃が未知の力を招きよせ、南承之は死の島の記憶から解かれ、生の方向へ向かう。読者はそんな予感を与えられます。

小説を読み終えて、主人公にとって「四・三事件」の記憶は現実の今であり、日本にいる今が非現実である、という感を深くします。犠牲者の名誉を回復する「四・三特別法」が成立し、現韓国大統領が島民虐殺を国家犯罪と認め、死者たちが歴史の闇から復権しつつある現在もなお、作者にとって死の島の記憶は生きつづけているにちがいありません。

作者は『火山島』を書いて、虚構と想像力によって歴史を現実によみがえらせました。さらに『地底の太陽』によって記憶を現実によみがえらせたのです。小説の恐ろしい力です。

(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)

蔵入れされる昭和

丁章

いつも身辺に転がっていた昭和が
目の届かないところへ押し込まれてしまう

ぬりつぶされた昭和も
ぬりつぶされた昭和も

じつは わたし 昭和生まれです

昭和に産み落とされた

落とし子なのです

昭和の蔵入れと共に

またあの暗闇に

押し込められる落とし子たち

昭和を押し込んだ

諸々の者たちは

浮かれているのか

諦めてしまったのか

みんな手をあげている

そして到来する

新しいはずの時代は

ぬりつぶされた古びた時代を

また繰り返そうとしているだけ

耳をすませば

蔵の中から

かすかに洩れ出す

落とし子たちの

心の声

丁章 (ちよん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)

詩集『マウムソリ -心の声-』(新幹社)

詩集『闊歩する在日』(新幹社)

丁章さんの詩集(第3集まで発刊)は
聖公会生野センターでも取り扱っています。

伊藤美佐子

権利とは人が人間らしく生きるために欠かせないものです。今、子どもたちの権利は守られているでしょうか。

子どもたちの“いのち”が大切にされないことが起こっています。日本ではいじめ、幼児虐待が社会問題となり、世界には戦争、病気、児童労働等、厳しい暮らしをしている子どもたちがいます。世界中の子どもたちが健やかに成長できるように願いをこめて“子どもの権利条約”が1989年11月に国際連合で採択されました。日本は1994年にこの条約を結んでいます。この条約は54条からなっていて、世界中の子どもたちの大きな味方であり、世界中のすべての子どもたちが持っている権利について定めています。大きく分けると、生きる権利・育つ権利・守られる権利・参加する権利の4つです。

「子どもの権利条約」

第2条、第6条は次のとおりです。

第2条：差別の禁止

すべての子どもは、みんな平等にこの条約にある権利をもっています。子どもは、国のちがいや、男か女か、どのようなことばを使うか、どんな宗教を信じているか、どんな意見をもっているか、心やからだに障害があるかないか、お金持ちであるかないか、などによって差別されません。

第6条：生きる権利・育つ権利

すべての子どもは、生きる権利をもっています。国はその権利を守るために、できるかぎりのことをしなければなりません。

“子どもの権利条約”を読み、子どもたちの権利について考えてみませんか。

(いとうみさこ)

余韻

=3年ぶり、そして30年ぶり=

■5月に3年ぶりに濟州島に行った。この前は4年前に亡くなった母の墓作りである。今回は聖公会生野センターのノリバンのハルモニ14人と一緒に総勢15名である。昨年秋から「濟州島に行きたい。濟州島に行きたい」とノリバンでは時々話題になっていたが、体のことや予算の都合もあり、決断はできなかった。しかし87歳になるハルモニが「死ぬ前に故郷の村を見たい。もう知り合いもおらんやろけど・・・」の一言が私に決断をさせた。30年ぶりに故郷の村に着き、歩いてみたが、知り合いに会えない。道行くおばさんと少し話して、事情を言うだけでその村を去った。夜、ホテルにハルモニの友人が突然訪ねてきた。昼間会ったおばさんから聞いたようだ。30年ぶりの再会！朝鮮人として、在日朝鮮人として、女性としてマージナルな人として今まで自己犠牲を強いられてきた人が「主人公」になった瞬間であった。私はこの人たちと係わることができて本当に幸せだと思う。■濟州島はいつ行っても、道路工事中。国を挙げて観光地化しているからだろうが、父母の故郷が「資本の力」でどんどん変貌していくのは少し寂しい（ピクアンヒャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail: ikuno@nssk.org
http://www.nssk.org/province/ikuno
発行人：宇野 徹
編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。